

池上彰の
これ
聞いて
いいですか？



若者よ 志立て学ぼう



「リベラルアーツは、単なる教養教育ではなく『自由への道』なのです」。
上田紀行さんはそう語る—東京都千代田区で3月18日、内藤絵美撮影

学生は評価システムの奴隷になっているのではない。か。そのような反省から東京工業大は2016年からリベラルアーツ教育を導入し、独自のカリキュラムを実施している。一連の改革を進めたのが、文化人類学者で、3月まで東工大副学長を務めた上田紀行さん(65)。ジャーナリストの池上彰さんとの対談では、リベラルアーツ教育の必要性や、教育の問題点などについて幅広く語った。

◇

池上 理系の大学でリベラルアーツの教育が細々とスタートしました。それが今やリベラルアーツといえは東大と言われ、大学関係者らの視察も相次いでいます。なぜ、この教育が大切だと考えたのですか。

上田 1990年代半ばから「大学はもっと社会に役立つ人材、即戦力を出すべきだ」との声が強まってきました。その流れで教養教育が軽視されるようになり、早く専門教育をすべきだという考え方が主流になりました。この流れに強い危機感を持ったのが、リベラルアーツの再評価のきっかけです。

池上 オウム真理教事件では、高い専門知識を有した若者たちが凶悪な犯罪に関与しました。幅広い教養がないと、若者が怪しい宗教にひっかかるという反省はあったのでしょうか。

上田 「志」を育むリベラルアーツを台言葉に、まず入学直後に「立志プロジェクト」を必修科目にしました。さまざまな分野の第一人者の講演を、1学年約1000人全員が聞け

ね。しかし、指示待ち、おとなしい、優等生だけと迫力がない。自分の中から発してくる活気みたいなものが、若者たちになかった。声は多く聞かえてきました。

池上 そこでリベラルアーツを導入したわけですが、具体的にどのような取り組みを進めたのでしょうか。

自由へのリベラルアーツ

池上 具体策の検討には悩まれたとお察しします。

上田 リベラルアーツという言葉の原義は、人間を自由にするわざ、人間が自由になるわざ、という意味です。ギリシャ・ローマ時代に二つの階級、自由市民と奴隷を分かつものがリベラルアーツで、単にものを知っていればいいという話ではなく、そこには「現代社会で果たして人間は自由なのか？」との強い問い掛けがあります。

成績ばかりを気にしている学生が増えてきて、どうやらいい点数が取れるのかとそんなくしている。それは、評価システムの奴隷ではないかという反省です。インベンションや、新たな時代の創造は自由人からしか生まれません。だから常識の中でいい評価を得るのではなく、今の枠組みを疑い、ぶっ飛ばすぐらいの自由な発想が求められるのではないかと考えたのです。リベラルアーツは、単なる教養教育ではなく「自由への道」なのです。

うえだ・のりゆき 1958年、東京都生まれ。文化人類学者。スリランカの民族仏教の研究などから、宗教や「癒やし」を専門にしてきた。東工大リベラルアーツ研究院院長などを歴任し、4月から東海学園大特命副学長・卓越教授に。著書に「生きる意味」「新・大学でなにを学ぶか」など。

池上 子ども頃から正解があるに違いないと疑わず、いち早く答えを見つけて「よくできたね」と褒められる。求められる答えを早く察知することによって、いい成績が取れる。そのような学生が東工大にも大勢いたでしょう。

上田 そうでした。初期条件を与えられた時の最適解を、できるだけ早く聞

【構成・瀬尾忠義】
3面に つづく

迫る つながる たのしみ 気になる

今回のゲスト 文化人類学者 上田紀行さん

池上彰の
聞いつづつあるか?

← 1面からつづく

池上 米国では、グーグルやアマゾンといった「GAF A」と呼ばれる巨大IT企業が次々と誕生したのに、日本では生まれていません。そのような反省もあって、社会がリベラルアーツを受け入れるようになってきた背景があるのでしょうか。

上田 そうですね。教育ではクリティカルシンキングと表現される批判的思考が足りません。物事をうのみにせず、まず疑って自分の頭で考えてみる。そのような教育は、初等教育から行われてきませんでした。

また、入試を受けずに大学に入る指定校推薦が広がっています。そうすると高校で先生の機嫌を損ねてしまったら、いい内申が取れません。昔は、先生と反りが合わなかったりして反抗的でも入試で合格して先生たちを見返してやる、というチャンスめいたものがありました。しかし今は、人の顔を見て行動し、先生たちから無理難題を突き付けられても疑わずに応じてしまう生徒が増えている気がします。早い段階で文系と理系を分けていくのも愚の骨頂でしょう。そのようなことも心配ですね。

池上 先生の立場で考えると、指示通りに生徒が行動してくれと桑でずから、「個性ある子ども」とアピールしても、本当に飛び抜けた個性が出てくると手に余ってしまう……というわけですね。

上田 「個性」というのが、くせものです。成績が良かったり、お金を生み出したりするようない見「役に立つ」個性が偏重されている。でも例えるならば、芸術家の岡本太郎のような世の中の常識を破壊してしまうエネルギーも「個性」です。爆発力がある個性を、この社会から出しているのかという疑問があります。

池上 教育には問題が山積みしています。その一方で上田さんの人生に目を向ければ、波瀾万丈がありました。もともと理系の学部に入ったのに、文系に変えました。なぜでしょう。

上田 理系の学部に入ったのはまぐれで、入試でたまたま知っていた数学の問題が出たので合格しました。しかしこれが暗い影を落としまして……。入ったてみたら数学も物理も好きじゃない、できない。周りにできる人たちがうじゃうじゃいる。

文化人類学者の上田紀行さん(右)と池上彰さんの対談では、塾現場での「個性」を巡る議論も交わされた(東京都千代田区、3月18日、内線絵筆撮影)



それに人生の悩みを打ち明けても誰にも通じない。しかも世の中は、金を使って遊べばいいじゃんという時代に突入してしまっている。男子校に6年通いましたから、女子学生と世間話すらできませんでした。

池上 1回目の挫折ですね。

上田 理系の科目は赤点で、留年です。ただ、2年目に社会学の見田宗介先生のゼミに入ったことで変わりました。とにかく大学中からヘンな学生が集まっている。そしてゼミ生同士で語る、語る。ゼミで知り合った友達やインドに半年くらい行ってきて「お前もインドに行け」と。それで私もインドを訪れたら、底知れぬ奥深さとか、訳の分からない世界があるんだと衝撃を受けました。私は、東京でもインドでは東京のこの字も通じない。これがよかった。自分をぶち壊すには、自分と違う世界にいきなり飛び込んでしまうのがいいのかもしれない。

池上 インドでまず変わったですね。

上田 「あなたは狭い世界にいます」と突き付けられ、文化人類学に転じました。狭い世界にいたのは今の学生でも同じなかも。東大では関東南出身の学生が7割を超えています。全国の大学でも同じ傾向で、自分が暮らしているところから遠く離れた大学には行かない。県境を越えなへなり、移動が難しかった江戸時代に近づいていると感じてしまふほどです。

池上 インドの後は流れ流れてスリランカに向かいました。

上田 理系に入ったので遺伝子生物学をやろうと漠然と考えていた時期がありました。20代後半でスリランカの悪魔払いの研究に足を踏み入れたので

上田さん 爆発する個性 出せているか

池上さん 日本が生めなかった巨大IT

す。

池上 どの段階で研究者になろうと決心したのですか。

上田 それは割と引き算の考え方だったかも。大学4年の時、自宅にはリクルートブックが積み重なりましたが、毎日、ネクタイを締めて満員電車に乗るのは無理だと真剣に悩んで。大学の分は高く売れる時期を逃してしまつたと痛感したものです。

ところがスリランカに2年間行くことになる、今度は「人生の勝ち組」であるはずの友達に「お前が羨ましい」と言うのです。「俺の人生は支社で保険商品を売り、本社に戻れば計算ばかり。1週間程度の休暇がせいぜいで、あと30年、会社という場所にとひたすら動機続けるのが俺の人生なんだ」と。最大の「負け組」と思っていました。が、時間の自由を手に入れることは人生の最大の魅力なんだと改めて気がつきました。

池上 愛媛大で教員の道に進まれ、東大に移られました。学生印象はどうでしたか。

上田 学生の質問が鋭くて「前回の授業今回で矛盾したことを言っている」となど詰められることもあって、教える側も鍛えられました。でも年とともに、そんな骨のある質問は徐々に減ってきて、評価の仕方尋ねる質問ばかり多くなつた。ちょうど多くの大学で教養学部が廃止され、成果主義が入ってきた時期と重なります。みんなのように点数が付くのかを気にするばかりで、評価されることだけやればいい、それ以外は人生のコストパフォーマンスが悪いという考えが、若者も社会も覆い尽くすようになっていったのです。

池上 さままさまな危機意識からリベラルアーツが必要だったわけですね。

上田 このままでは評価の奴隷になってしまう。若者には無限の可能性があるので、評

価システムの奴隷として卒業させるのは、教育者として耐えられない。裾野の広い自由人を社会に出していかなければ、大学ー大きな学びという名前が泣くとも考えました。

池上 リベラルアーツを導入したことで、キャンパスの生協で本の売り上げが目に見えて変わったと伺いました。

上田 講演してくれたゲストに生協でサイン会をしてもいいなりと、いろいろ働き掛けました。すると4、5月で人文社会関連の本の売り上げが、改革前の2015年とはたつた75冊でした。17年には1750冊になりました。本は単なる情報やモノじゃない。筆者のパーソナリティ(情熱)が文字となり、本になっていることを講演やサイン会で知ってほしい。そして学生が読書の幅が広がり、明らかに考察が深くなったと感じます。

池上 3月で東大を定年退職されましたが、4月からはどのようなことを手掛けるのでしょうか。

上田 東大では「いじめゼロ・プロジェクト」を続けます。科学技術の知も導入して、いじめを無くしたい。生徒のポケットにカード型センサーを入れて相互の共感度をセンシング(計測して情報取得)して、いじめを未然に防止したいといった研究実践を進めます。米国のように学校にも監視カメラを導入するといった、ものすごい監視社会となることを防ぎつつ、いじめをゼロに近づけたい。

4月からは東海学園大の特命副学長・卓越教授として新たな教育改革に着手します。仏教系の大学なので「共生」と書いて「どういきて」と読む大きな理念を掲げていますが、そこに世界の賢人会議の「ローマクラブ」の日本支部が設立されます。「ともいき」を、平和、人権や気候変動といったグローバルな視点と合体させ「世界トランスフォーメーション学部」のようなものが作れないか。新しい道に今、ワクワクしているところです。

【構成 瀬尾志義】

おれ申し上げます

池上彰

実は上田さんは、私を東大に引っ張ってこようと「画策」された一人。上田さんの情熱が私にも伝染し、大学改革のお手伝いをすることになりました。当初は小さな組織でしたが、今や堂々たる存在になりました。東大は理系の大学ながら過去には文系の高名な学者が多数教鞭をとっていました。現在のリベラルアーツ教育は、いわばその現代版を復活させようという試みなのです。東大は今秋、東京医科歯科大と一緒にいます。今後は医療の道に進もうとする学生諸君とも切磋琢磨しながら「立憲」について考えていきます。

池上さんに提案したいテーマやご意見を、QRコードからお寄せください。

